

千里第二小学校時代の思い出

三十二回生 赤井 恭平

私にとっての小学校は千里第二小学校ただひとつです。

私は就学前から小学校卒業まで、常に頭の中を占めていたのは「今日は誰と遊べるかな」ということでした。随分多くの友達の家遊びに行きました。今でも誰の家がどこにあったか、かなり正確に覚えているつもりです。

これから、遠い過去(61〜55年前)の記憶をたぐり寄せ、6年間の素晴らしき友人達との日々について、気の向くまま、思いつくまま、自分史として書かせて頂きます。

あくまでも私個人及び周辺の出来事しか登場しません。多くの方々にとっては殆ど興味を抱く内容ではないでしょう。とはいえ、「(時代、学年が違っても)

こんなところは自分たちと共通しているなあ」とお感じになる部分があれば幸いです。なお、所々事実誤認があるかも知れません。ご了承願います。

なお、私の在学中の校長先生は以下の通りです。

有川清夫先生 在任期間：1952年(昭和27年)10月1日〜1958年(昭和33年)7月31日。

出水久太郎(のみずきゆうたろう)先生

在任期間：1959年(昭和34年)

9月1日〜1965年(昭和40年)4月1日。



最初に1〜2年生の時に同級(植田芳子先生のクラス)で、卒業以来、会うことがなかったこの男について述べたい。寺田春秋君だ。強烈に記憶に残っている印象的な出来事が幾つかある。まずは、入学間もない頃、寺田君を主人と仰ぐピッツと言う名のスピッツと、彼の家の近くの山林入口に向かって散策した時のこと。ピッツは彼の命令にことごとく瞬時に反応する

とてもお利口な愛犬で、嬉嬉として我々に従ってきた。ところが、私は彼が急に発した言葉に耳を疑った。

「ピッツお帰り」と非情な命令を下したのだ。私は息を凝らして事の成り行きを見守った。ピッツの悲しげな表情は今も忘れられない。ピッツは重い足取りで来た道をとぼとぼと帰り始めた。20〜30mほど戻ったあたりだったろうか、寺田君が「ピッツ、おいで」と声を掛けた。ピッツの喜びようは言うまでもない。私は大きなショックを受けた。私がそれまで(及びこのとき以降もそうだが)飼っていたすべての犬は鎖から解放するものなら、行ったきり帰ってこない鉄砲玉ばかりだったからである。

こんなこともあった。旧運動場の端、道路に並行して立っていた校舎と校舎の間のトイレ(いや便所)と直角に位置していた水飲み場での事件。或る日、蛇口の一つが破裂して大噴火(いや、大噴水)し、何人かがびしょ濡れになった。私を含めて周囲の児童たちはどうすることもできず、ただ呆然と見つめているだ

けだった。解決方法なんて、並の低学年児童には知る由もない。その時、登場したのが寺田くん。的確な指示を出した。「他の蛇口も全部開ける!」。水圧が平準化され、事態が収まった。

私はこのエピソードを、これまで色んな飲み会で酒の肴にさせて頂いた。全員が一緒に「凄いやつだね」と。その都度、何故かわたしがヒーローの気分を味わってきた(笑)。

実はこの3月末、彼と実に55年ぶりの再会を果たしたのだ。神原健二君(後述)と共に。

もちろん、前述の話を彼にぶつけてみた。ところが彼の回答は「ことごとく覚えていない」。彼にとっでは日常的事項の単なる一欠片で、当たり前のことだったというのだ。愛犬ピッツに関しては、保母をされていたお母様が犬のしつけも的確だったため、「どの犬も同じように言うことをきくものと思っていた」と。水飲み場の一件に至っては「覚えていないが、(赤井君の言うとおりに)対応方法を知っていたわ

けではない。そのようにすれば上手くいくかなと判断したのだろう」と。彼の人生の「年足らずの知識から瞬時に導き出した回答だったというのだ。スーパー応用力！改めて驚かされた。

◇

次にやはり1〜2年が同級で、卒業以来、会っていない金久修（かねひさ）君を挙げたい。初めての2学期。家族で里帰り（お父さんが奄美出身）したお土産のサトウキビが彼からクラスに配られた。今も甘さ溢れる初めての味に感動させられたことは忘れられない。

ところで、2年生の終わり頃まで住んでいた「大学前」の私の家には既にTVがあった。彼はご家族の影響なのだろう、鹿児島県徳之島出身の3代目朝潮太郎の大ファンだった。大相撲が始まると金久君は毎日のように我が家に来て、TVに向かって「あさしお！」と大声で勝負がつくまで声援を送り、私は「若ノ花！」と張り合ったものだ。

配の太田先生（表記が間違っているかも知れない）の通勤姿である。補助輪を外した間もない男の子には「エンジン付き自転車」は憧れだった。

◇

さて、グレース幼稚園時代からの友人、六角耕一郎くんも挙げたい。幼稚園で1年保育の私は彼から“先輩”として色々教えてもらい、千二では1〜2年、5〜6年と同級だった。私は走るのが遅かった。4年の時は8m走10.0秒だった。父は小学校時代「秒ちよつとで走ったという。遺伝しなかったのだ。当時、職員室の外に千二小学校記録が掲示されていた。8mは小川○○氏の7.4秒だったと記憶している。という事で、足の速い六角くん走り方の極意を教わった。「足は後ろに蹴ったら、できるだけ地面すれすれにして前に持つて行け。それを両足交互に。足は高く上げたらあかん。上げている時間が無駄や」というのが六角理論だった。忍者が水面を沈むことなく、素早く走りきる極意に似ている。半信半疑だったが、尊敬

2年生になると、我々は始業前に分校の裏庭で相撲を取り、TVで習得した技を掛け合った。良い勝負だったように思う。また、彼から「話をしよう」と声を掛けられ、裏庭の土手の前に並んで座り、いろんなことを語り合ったのも始業前の日課の一つであった。

◇

話はそれるが、「大学前」の家の前には道路を挟み小川が流れていた。台風や大雨の後には道路にはみ出んばかりに水位が上がり、流れが速くなった。だがそれだけではない。多くの魚が上流から流されてくるのだ。それを見たさに、その度に私はぎりぎりまで近づいたものだ。まだ強風がそれほど収まっていないこともあった。危険きわまりない行為だったと思う。

「大学前」の家で思い出したことがある。エンジンを付けた自転車で颯爽と我が家の前を走り去る、年

する彼の話なのだから「そうなのか」とも思った。

2年生の終わりに引越した先は敷地（300坪）の「4が家屋、1/4が庭、残りが裏山だった。桜の木やびわの木などが何本もあり、金網を超えて侵入し宴を開いた花見客（？）もいた。狸や狐もやって来た。苦手な蛇も見かけた。夏から秋にかけては千里山で見られたすべての蟬がやって来たし（ひぐらしは来なかった）、カブトムシやクワガタも友人だった。前の所有者は、千二の卒業生で「大きな古時計」の訳詞や、フジテレビ「ミュージックフェア」テーマソング作詞などで名を残されている放送作家の故・保富康午（ほとみこうご）氏。お父様が亡くなられたため売却されることになったのだった。保富氏は若手ながら第一線で活躍を始めた頃で、活動拠点は既に東京であった。私が初めて氏にお目にかかったのはそれから10年後、音楽ビジネスに就きたくて大学生になった18歳の時（1967年）だった。入学早々、デビュー間もない沢田研二率いるザ・タイガースのTV収録に立ち会わせて

頂き、ゴールデンウィークには氏の愛車ロータス・エランに同乗し山中湖の氏の別荘に宿泊。そこから富士スピードウェイで決勝が行われた「第4回日本グランプリ自動車レース大会」<1967年日本グランプリ（4輪）>の取材に同行させて頂いた（私はレースを覗いていただけだったが）。その後も、超高額のアルバイトとして、雑誌付録の「歌詞特集」の洋楽解説（クレジットII私の名前入り）や、人気歌番組「夜のヒットスタジオ」の台本作成（ほんの一部だが）の仕事をして頂くなど、随分目に掛けて頂いた。

閑話休題。六角くんに話を戻そう。彼とは「平和のために戦争しよう」と、インディアンごっこをよくやった。彼は口に手を当ててアワワワワという雄叫びが得意だった。我々の遊びがどんなものだったか記憶が曖昧なのだが、誰も怪我をしなかったから、せいぜい輪ゴム鉄砲での戦い程度だったのだろう。

3年生（分校）の体育のソフトボールの時、伊丹

次は筒井明君だ。ギョロッとした目（これは今も同じ）の元気でお茶目な腕白坊主だった。当時朝日放送「ABCこどものうた」というラジオ番組で月に2曲の新曲を放送していた。その中の一曲、南極に取り残されたにも拘わらず生き延びていた「タロとジロ」を称えた歌を音楽の時間か何かで私がアカペラで歌ったのを彼が覚えていて、「感動的だった。一度しか聴いていないのに」と同窓会で話してくれた。2頭の生存確認は1959年（昭和34年）1月15日だから小学4年生の3学期の話になる。歌詞は曖昧だがメロディーは今も鮮明に覚えている。少しばかり紹介したい。「よかったよかった生きていた南極基地の樺太犬 ちぎれるばかりに尾を振って飛びついたというタロ、ジロあまりのことに嬉しさに観測隊の隊員は 思わず頬ずりしたという 思わず泣けてきたという」。筒井君から、今も住人である千里山の情報が届くのが楽しみみの一つになっている。

君が振ったバットが折れ、その破片が3塁側で出番を待っていた私のアゴを直撃し、一発KOを食らったことがあった。一瞬の出来事だった。気がついたら担任の田中和雄先生や級友が心配そうに私の周りに集まってきた。覚えていたのは、当たった瞬間「カツッ！」という乾いた音がしたことだけ。TVの西部劇に出てくるパンチの音と同じだと妙に感心したこと覚えてる。私が意識を回復したら、何事もなかったようにゲームは続けられた。

ソフトボールといえば、4年生の時の大会で我がクラスは決勝に進出した。相手は小西敏照先生のクラス。私は先発メンバーに選ばれた。なぜか事前に練習試合があつて、小柄な私は四球を選びまくったからだ。田中先生がニコニコして話された「赤井にはストライク入らへん」のは慧眼であつた、とその時は感じた。しかし、本番は全く違った。次は小西先生のクラスになりたい、その時真剣にそう願った。

「ABCこどものうた」といえば、同番組の愛聴者だった草野道広君を思い出す。「今度の曲は『ぞうのたまごのたまごやき』やなどと教えてくれた。『道ちゃんみちみち、』なんて一緒に歌ったものだ。彼の家の庭には（私が知っている唯一の防空壕）があつてよく遊んだ。また、彼のお父さんの会社で作つていた録音機も印象深い。私が初めて自分の声を録音した機械だ。後に出現するオーブリールやカセットとは異なり、磁気をまぶしたA4程の特性記録用紙に録音するものだったと思う。初めて対面した自分の声には驚いた。美声のはずなのに。あの機械はその後どうなったのだろうか？ 試作機だったのかも知れない。草野君は釣りの名手だった。クラスの何人かで連れ立って、校区内のありとあらゆる池に釣りに行った。いつも必ず、最も多く釣り上げるのは彼と相場が決まっていた。最高峰の鯉までゲットしたのは数知れず。なぜ彼に集中するのは未だに不思議に思っている。

一方、彼は音楽の才に恵まれていて（後に大阪音楽大学教授／声楽になる逸材）、高校1年の時、私と岩崎文夫君（後述）と福井君の4人でフォークバンドを結成したことも付記しておく。

◇

ここまで登場したのは男子ばかりだが、ひとり、女性を挙げたい。藤本道子さんである。一緒に遊んだ思い出というものではない。彼女の陰に隠れて埋もれてしまった話である。

高校まで進路は同じだったが、彼女は（体育以外は）常に「5」という才媛だ。

5年か6年生の時の音楽の時間の話。各自が作曲した中から、担当の木島賢二先生が優秀作品を発表することにになっていた。ファイナリスト数曲を先生が歌と共にピアノ演奏した。もちろん、私の曲も。私には手応えがあった（根拠はないが）。しかし、グランプリに輝いたのは彼女の作品「春の庭」（タイトルは定かではないが）だった。私ののは3/8拍子のメロディー

中心の作品だったが、彼女のそれは3/4拍子のTempoの
良い明るい曲。メロディーは今でも覚えている（ご本人はどうかな、今度尋ねてみたい）。木島先生は女の子に甘いからなあ、と自分を納得させるしかなかった。

◇

としか木島先生を評価していないかのような記述をしたが、それはあくまでも私の感じていた一面に過ぎない。1959年11月15日に創立30周年式典が行われ校歌が制定された。

このとき、式典に出席し校歌を演奏する選抜メンバーを木島先生が決めた。コーラスもあったかどうかは覚えていない。殆どの児童がスペリオパイプを担当するのだが、アルトパイプでの参加という手もあり、父に買って欲しいとねだったが聞き入れられなかった。メンバーからは漏れた。式典の様子がラジオで放送され、校歌が流れた。良い曲だなと感じた。校歌をバツクに、5年生の女子児童岸田さん（だったと思う）が喜びを綴った作文を朗読した。

私は「千里第二小学校校歌」を誇りに思っている。

同時に、作詞者、作曲者の才能に敬意を表している。作詞は飯田氏（私と同級の飯田さんのお父様。フルネームを思い出せない）と記憶している。作曲者は木島賢二先生である。

ところが、千里第二小学校のホームページには作詞作曲者のクレジットがない。何故なのか、特段の事情があるのか？レコード会社に進み、著作者を敬う権利ビジネスの世界で生きていた私にとっては看過したくないことである。千里山会から申し入れて頂ければ事情が変わるかも知れないと期待している。

木島先生について書き加えたいことがある。卒業式のことだ。在校生を代表して5年生が出席し、そこで木島先生作の卒業生を送る歌を歌ったのだ。ゆっくりとしたテンポで「慕いし兄、姉は、むとせ（6年）の技を終え」と歌い出す。そして途中で「留まる我ら」とアップテンポになるのだ。よくできた曲だと今でも思う。いつまで歌われ続けたのだろうか？

◇

ちよつと話題を変えて、千里山の思い出を少し。現在では考えられないことがかなりあった。但し、これから書くこと一つ一つには繋がりはない。

◆低学年の頃の学校の帰り道、よく露天商が我々を待ち構えていた。子供にとっては魅力的な品ばかり。お金がなかったから買った記憶はないが。いつの頃からか見かけなくなった。

◆これも低学年の頃の話。セスナーを飛ばして上空からチラシや商品をばらまくという、宣伝方法があった。小さな落下傘に商品がくっつけられていることも多く、商品やビラよりも落下傘目当てに追いかけたものだ。豊津まで走って行ったこともあった。

◆千里山駅前の交番での話。学校の帰りによく遊びに行っていた（遊びに行くようなところではないのだが）。そしてピストルを見せてもらった。弾丸ものどかな時代だった。

◆のどかといえは関西大学馬術部の学生が馬を散歩させていた（いや乗馬しながら散歩していたのか）。ある日、気丈なワンちゃんが散歩中の馬のしつぽに食らいつき、「ウーウー」と唸り、一生懸命引つ張って離さいという事件が起きた。馬は無視して歩き続けた。だがワンちゃんはしつこかった。しかし、次の一瞬、馬の後ろ足の一蹴りで静寂が訪れた。数秒後、ワンちゃんが動き出したのでホッとした。もちろんワンちゃんは追跡を諦めた。翌日も、またその翌日もそのワンちゃんは元気な姿を見せていた。

◆「ウサギ狩り」という今では考えられない行事があった。病弱だった私は参加経験がないが、翌日朝刊には写真入りで勝利の瞬間が掲載されていた。いつまで続いたのか。

◇
ここで永沢克二君の名を挙げたい。4年生の頃東京から引越してきたため、最後まで東京弁が抜けな

従順だったように思う。彼は大学生のヘルプなしで堂々と乗りこなしていた。私のお目当ては社交的な「スリービート」。いつもどきどきおどおどしている私を2〜3周、優しく乗せてくれた。

◇
山田明君も大きな部分を占める友人のひとりである。彼とは高校まで同じで、今も親交があるため、忘れたいような痛いところをよく突かれる。「赤井は運動神経が悪かったなあ」などと平気で言ってくる。確かに、彼のドッジボール大会での活躍は素晴らしかったから言われても仕方がないのだが。

彼が住んでいた団地（星ヶ丘）には1階の敷地に各戸の物置（納戸）が並んで置かれていた。高さは2m程か。その物置群の上を我々は飛び駆け回るので。ところが、群と群との間、所々にある50〜60cmの空間を私は恐くてなかなか飛び越えることができなかった。私の後に誰かがいればそこで渋滞するのである。最後は決行せざるを得ないのだが、現在も成功の喜びより

かった。彼は運動神経もあつたうえ、気が強い男だった。

「スキップのように駆けながら、両手で交互にお尻を軽くひつぱたと馬が走っている音が出せるよ」と教えられ、2人で走り回ったことがあった。「パカパツ、パカパツ」。確かに雰囲気は出ていた。創意工夫に長けた人物だった。

ある日、彼が関西大学馬術部に渡りを付け、放課後、クラスの何人かが厩舎に行き、そして訓練場で乗馬させて貰えることになった。もちろん、馬術部のお兄ちゃん達が手綱を引つ張ってくれるのだが。馬術部に遊びに行く日は気もそぞろ。用意した野菜を馬は喜んでくれるだろうかなんて考えて、授業なんかまるつきり頭に入らなかつた。

高学年とはいえ、馬は大きくて恐ろしい。だが、怖がつてはいけない、馬に感づかれ馬鹿にされると教わった。永沢君は言うことをきかない馬には平気で鼻っ面をひつぱっていた。馬の方も納得して、彼には

も、恐怖心によるプレッシャーを受けた記憶が残っているのは情けない。それにしても、山田君には「覚えていけるなよ、何回もあつたという話じゃないだろう？」と言いたい。

◇
ところで、私は懸垂が全くできず、田中先生に「肉屋の看板」と揶揄されていたが、努力の甲斐あつてもできるようになっていた。この話、娘には全く信用されていないが。

◇
5〜6年は念願叶って小西先生のクラス（月組）になり、土日の午後、毎週のように正門前にあつた空き地で野球をやった、参加者が我々のクラスばかりだったのが不思議だが。時々、1年上の加来君（当時は先輩でも男性は「くん」だった）が参加した。彼の鋭く曲がるカーブは我々には初めての球種。全く打てなかつた。

その内、野球帽を作ろうということになった。

「強い」って英語でなんて言うんや？ 英語を習っていた右の本格派エースの井上進君が「ストロング」と応え、チーム名が決まった。「なかよしストロング」だ。エンブレムはニューヨーク Yankees の Y が S に変わったものと考えて頂きたい。山田君を始め、みんな上手だった。コントロール抜群の左腕、高橋正敏君も安定していた。校内野球大会では当然のように結果を残した。私が応援したこともあり。

◇

夏休みには富士銀行の寮のプールを借りて水泳教室（授業）が行われた。いつも楽しみだった。市岡高校水泳部、平泳ぎ 100m 1分 20 秒だったという小西先生の模範演技が忘れられない。我々のリクエストに応じてくださったバタフライ。足の使い方は当時主流になりつつあったドルフィンキックではなく平泳ぎの足だったのが懐かしい。

クラスの数人で連れ立って何度も服部緑地公園のプールに行った。私を除いてみんな泳げたので、仕方

ところで、中学 1 年 1 学期の成績表を小学校の恩師にご覧に入れるという習慣があった。私もそうしたところが、中 1 で同じクラスの女子生徒が何故か私の成績表を豊山先生に。豊山先生から依頼があったようなのだ。そして同級の彼女からパンチを食らった。「豊山先生が、赤井君って思っていたより良かったことないのね」と。未だにこの経緯は謎である。

◇

ここで最初に登場した神原健二君に触れたい。彼とは高校まで同じだったのに言葉を交わしたことは殆どなかった。一度もなかったかも知れないほどだ。それぞれ、クラスがかなり離れていたことも理由の一つか。裸足で走るのが早く、学業優秀であることは知っていたが。

それはさておき、彼とは 1977 年 2 月、夕方、まだ暗くなる前の青森駅前と思わぬ再会を果たしたのだ。私は仙台転勤後の初めての青森出張。彼は同地出身（東京生まれ、青森に疎開）の女優・奈良岡朋子さん

なく私も大人でも背が立たない深い方のプールで泳いだ。といっても、プールの縁から数十センチのところまでバシヤバシヤやる程度だが。ところがある日、調子に乗って少し離れ過ぎてしまった。プールサイドにすぐ戻れるはずなのに、方向が違っていった。そして溺れた。その時、異変に気付いた岩崎文夫君が声を掛けながら手をさしのべてくれた。私が慌てず、焦らなかつたのも良かった。何事もなかったようにその後も時間まで遊んだ。

◇

このようなことを経て、6 年生の終わりにプールが完成した。寄附金を納めていたということから、夏休みに卒業生が利用できる日があったが、その日以外にも我々は小西先生の出勤日を狙って訪ね、幾度となく長時間にわたって泳がせてもらった。

を迎える NHK の担当者だった。それ以降、何度か飲み会を重ねた。

さらに、それから 8 年近く後、関係が疎遠になっていた頃、大阪勤務の彼が上京してきた時にとあるビルで出くわしたのだ。彼には、私以外にも何人か偶然の出会いを経験しているという。何か魔力を携えているのだろうか。この辺り、これからの人生で探っきたい。

◇

最後に野々上進君の話をしたい。小西敏照先生についてももう一度触れたい。

野々上君は転勤組で東京弁。歯切れが良かった。彼から教わった糸鋸（いとのかぎり）イトノコ）にはカルチャーショックを覚えた。私は TV の西部劇が大好きで、ボール紙でピストルを作って遊んでいた。輪ゴムを飛ばす程度のものである。ところが糸鋸を使うと、木板の内部を切り取ったり、曲線的に切り取るこ

ち糸鋸の虜になり、いくつもの銃を作った。ゴムの反発力を利用して、1cm四方のボール紙を弾丸とするのだ。「拳銃無宿」で主人公ジョッシュ・ランダルを演じた人気爆発のステイブ・マックイーンが使用した、銃身の短いランダルカスタム（ランダル銃）がお気に入りだった。

野々上君とは彼の家の周囲で“撃ち合い”をした。ゴム鉄砲とは違い威力は抜群。半ズボンの坊やたちの足にはいつもアブに刺されたような痕跡が幾つか残っていた。

小西先生にとって我々は初めての卒業生。先生ではあったが友達感覚も強かった。1989年（昭和64年）1月、大相撲で新入幕の大鵬が初日から二の連勝を重ねた時のことだった。先生が「おおとりは強いとう」と発言された。すかさず、熊城憲一君（憲法の日生まれ）が「せんせ、ちやうで、たいほう言うんや」と訂正。みんなで大笑いした。

野々上君と最後に会ったのは、千二の校長になっ

ておられた小西先生く在任期間：1989年（平成4年）4月1日～1996年（平成8年）3月31日＞が定年を迎えられる前年の1995年（平成7年）だったと思う。

クラスの有志が集まり、先生にご案内頂き思い出の木造校舎を見て回った。その時に彼が撮影し、その後みんなに送ってくれたVTR、今もしっかりと大切にしている。